

非正規労働

下の写真は中日新聞 2月19日夕刊「くらしの図鑑」である。この欄では、ホットな話題がカラー刷りで分かりやすく図解され参考になる。今回のテーマは「非正規労働」であり、いまブームのトマ・ピケティ『21世紀の資本』で提起された格差拡大のメカニズムとも関わる問題である。日本の格差拡大は、規制緩和政策による非正規労働の急増によるところが大きい。



見出しは「家計支えながら 低年収にあえぐ」とある。リードから — 非正規労働者が4割に近づく中、賃金、待遇などで正社員との格差が縮まりません。国税庁の調査では非正規の平均年収は約168万円で、連合総研調べでも非正規の76%が年収200万円に達していませんでした。また、非正規の3人に1人は、家計の主たる稼ぎ手です。

非正規の実態は？

各種の図から、非正規労働者の厳しい実態が伝わってくる。非正規のうち主たる稼ぎ手だけをみると、年収200万円未満が53%と半数以上、300万円未満を合わせると86%にもなる。非正規の場合、主たる稼ぎ手であっても、十分な収入を得ていない。このため、非正規が主たる稼ぎ手の世帯では、家計が赤字というのが4割、約3割は貯蓄がない。4分の3の世帯が生活を切り詰めており、教育費の捻出も難しい状態にある。

日本の格差・貧困社会の実態が浮かび上がってくる。「アベノミクス」の名のもとに繰り広げられる経済政策により、低所得にあえぐ貧困の連鎖と生活困難が作り出されている。こうして安倍政権のもとで拡大している格差・貧困社会、非正規労働にともなう貧困の連鎖にもっと目を向ける必要がある。

(2015年2月25日)